
境界を越えて

まふおか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

境界を越えて

【Nコード】

N6349Z

【作者名】

まふおか

【あらすじ】

生まれて初めての彼氏と一緒に過ごす生まれて初めての夏休みがもうすぐやってくる。それなのに。「真奈美、ばいばい」――女子高生・真奈美の目の前で突然、恋人は消え去った――。悲しみに押し潰され、身を投げたはずなのになんで？！ 背中に翼生えました。鱗生えました。そして、異世界で最強最凶生物に化けました。女子高生が異世界トリップして種族間戦争に巻き込まれます。

この作品はのちのち、ダーク展開を予定しております。
バッドエンド耐性のない方にはお勧めしません。ご了承ください

い。

FC2ブログ「まふおか家」にて連載中の自作小説を転載しています。

ブローグ

ぴかり、と遠雷。

二、三拍間において篠突く雨の窓を叩く音が聞こえてきた。
今年はなかなか梅雨が明けない。

—— やだ、わたしったら、不幸だ

今まで何度もそう思ったことがある。

朝、何度髪をブラッシングしても寝癖が取れなかったり、学校の掃除当番がヘビーなエリアに割り振られたり、予習していないのに授業中、先生に当てられたり。コンビニのレジできつちり小銭が用意できない、そんなことも不幸に思えることだってある。

真奈美は気分屋だ。

ちよつとした「不幸」を見つけ出すのは、時間をやり過ごすだけの日常にリズムをつけるようなもので、今日「不幸」と断じたものが昨日もそうだったのかと問われれば、真奈美は「さあ」と首をひねるだろう。

—— さっきとちよつとノリがちがう

真奈美にとっての「不幸」とは転調や変拍子、フレーズの区切りですらなく、気ままに詠えた小節線のようなものだ。

自分が受け入れられない悔しさであったり、他者と比べて劣っている部分であったり、そんな自力で覆せないところを真奈美は「不幸」と考えない。それはもう幸不幸で分類するものではなく真奈美

自身の属性なのだから。真奈美にとっての不幸はもつと日常的で、身近で、口に含めば甘く、味わえばほのかに苦く、チョコレートボンボンのような軽い酩酊をもたらす、それ以上でもそれ以下でもない、ただそれだけのものだ。

だからといって空気を読まずに「わたし、不幸なんだもん」など
と見苦しく主張するわけではない。ただの口癖だ。

――何、これ

恋人の姿が、溶けてゆく。

薄れる自身の体をあわてた様子で確かめ恋人は「思っていたより早かったな」などとつぶやいた。でも、すぐに諦めたような顔で「真奈美、ばいばい」と微笑んだ。

今、昼休みなのに。学校の廊下、にぎやかに行き来する生徒達、なかなか明けない梅雨空、白々とした蛍光灯に照らされた廊下の隅の、昼間なのにほのかな、しかし不吉な暗がり。

薄れていく恋人の姿はまるで夕焼けに照らされているように赤い光に透けて輝いている。

おかしい。こんなのはおかしい。

真昼間なのに夕焼けなんておかしい。

人の姿がこんなに光に透けるなんて、おかしい。

廊下にふ、と何かが焦げたようなにおいが漂い、天井から一滴、汚らしい黒い雫が真奈美の左頬にぽつりと落ちた。真奈美がぐいつと拳で頬を拭ったその瞬間、恋人の姿は赤い光とともに薄れ、消えた。

眼前の光景は、真奈美にとって生まれて初めて目にするほんものの不幸だった。

立ち尽くす真奈美にぶつかり、訝しげに通り過ぎてゆく級友たち。服越しに伝わる衝撃、これが日常だ。

おかしい。なぜ消えた。おかしい。

身の内からむくむくと膨らんだ恐怖が溢れ、叫びの形をとろうとしたその刹那、新たな驚愕が真奈美を襲った。

—— 思い出せない

恋人を思い出せない。

前髪を鬱陶しげに払っていたのは覚えている。じゃあ、彼の髪形は、色や質感はどうだったか。

甘く睦言をささやいてもらったことは覚えている。じゃあ、その唇はどんな形をしていたのか。どんな声だったのか。

彼の頬に手を滑らせたことは覚えている。じゃあ、どんな肌だったのか。汗で湿っていたのか、すべすべしていたのか、ひげのそり残しがあったのか。

恋人の名前が何だったのか。真奈美は思い出せなくなってしまった。

期末試験があった。
一学期が終わった。

夏休みになった。

梅雨がなかなか明けない。

毎日雨が降っている。

試験の結果はボロボロだった。

友人たちの誘いはすべて断った。

夏休み、家族は遠巻きにして様子を見守っているようだったけれど、泣き叫ぶわけでなし、ただ茫然と自失して過ごす真奈美の姿は、傍目には特におかしく見えなかったかもしれない。

しかし、真奈美は喪失の痛みに苛まれていた。

アイドルほどではないかもしれないけれど、イケメンの彼氏。やさしくて、頼りがいがあつて、真奈美が「やだ、わたしったら不幸」とつぶやけば、あたふたとその不幸の種を探し出し取り除こうとしてくれる自慢の彼氏。

すべて真奈美の思い込みだったのか。

携帯電話のメモリーにあつたはずの恋人の写真はなくなっていた。飽きもせず似たようなポーズで散々いっしょに撮ったはずのプリクラは、恋人の部分のほかの友達に代わっていた。クラスメートだったのに、彼の席はなくなっていた。休み時間や放課後につるんでいた恋人の親友たちも、恋人をめぐって争ったいけない女子たちも彼の不在をいぶかしんだりしない。

まるで最初からそんな人間が存在しなかったみたいに。

真奈美自身、恋人を探そうとしても名前も顔も、「真奈美、ばいばい」と最後にかけられた声の色合いすら思い出せないのだ。

耐えがたいことに、恋人を失った瞬間の胸をえぐられるような悲しみさえ日々薄れていく。

ふと気がつくと、雨の音がやんでいた。それでも、晴れているわけではないらしい。

朝なのか、夕方なのか、よくわからない。カーテンの隙間からほの暗く弱々しい青い光が漏れ、部屋全体を染めている。

真奈美自身も青く染まる。青い手を眺めていて突然、真奈美は思った。

――行かなきゃ

玄関から家を出る。自宅だけでなく、隣近所の家も電灯が消え、青くくすんだ闇に沈んでいる。人の気配もない。ただ街灯がてんと列をなしている。

あてもなく、真奈美は走り始めた。

足が、高台の中腹にある自宅からさらに高いところへと自然に向く。ろくに動いていなかったため息が上がってしまうが、しばらく走っていると苦しいなりにだんだん慣れてきた。

坂道が急になる。

でも、真奈美はスピードを緩めない。

街灯が後ろへ、後ろへと流れていく。

青い闇に沈む住宅街や鎮守の森を駆け抜け、裏参道を登り切り、神社の境内へ躍り出ても真奈美は足を止めない。お社を背に表の参道へ向かって走る。

一帯の鎮守である神社の表参道は男坂と呼ばれる急勾配で、心臓破りの階段だ。階段の手前で止まらなければ、きつと足を滑らせてしまう。

――かまうもんか

走る。走る走る。

わかつている。このままでは階段から落ちて大怪我をするに違いない。もしかしたら大怪我では済まないかもしれない。だからといって、それがどうしたというのだろ。ひんやりとした空気の中で青く沈む街、誰も恋人のことを思い出さない。真奈美もきつともう彼のことを忘れてしまふ。それならば……！

もう止まらない。息をすることさえ忘れさらに速度を増し、青い闇の中を抜け、階段から虚空へ、真奈美は飛び出した。

「るああああああああああつ」

意味をなさない絶叫が口をつく。激しい光が一閃、真奈美の体を貫く。

激しい光が収まった後、焦げた臭いと黒く汚らしい水がぼたぼたと垂れる。あたりは何事もなかったかのようにまた青い闇に沈んだ。やがて、境内から見渡せる眼下の街のさらに向こう、ちらりと見える海に金色の光が差した。

時間はかかったものの、やっと梅雨が明けた。久しぶりに顔を出す太陽が朝からぎらぎらと街を灼く。

世界が瞬時、きしむように止まる。空間に出現した小さな裂け目が焦げた臭気と黒い水をじゅるじゅると吸い取り、きゅぽっ、と消えた。

そして、世界は何事もなかったかのようにふたたび回転し始めた。

参道から足を滑らせた少女の姿はない。だれもその不在をいぶかしんだりしない。

第一話 変化

真奈美は叫びながら落下している。

「るあああああああああああつ」

口からほとばしる絶叫が体を貫く。手足をばたつかせてもがくと、幾分痛みが和らいだが、背中、肩甲骨のあたりは却って痛みがひどくなっている。

——痛い、熱い、熱い！

「るあああああああああああつ」

再度叫ぶと、体の中を何かが駆け抜け、外へ飛び出し、爆ぜる。その衝撃に体が跳ねたその途端、真奈美の背中がみしり、と裂けて翼が現れた。

気絶しそうな痛みに苛まれながら真奈美は落下し続けている。痛みをやり過ぎそうと再度もがいた時、翼が開いた。下からの気流に揉まれて、翼がもげそうになる。錐揉み落下を続けながら、痛みの少ない体勢を探すうちに少しずつ、真奈美は翼を使えるようになった。

滑空を覚え、やっと周囲を見渡す気持ちの余裕ができた。

——ここどこ？

神社の境内から落ちたはずなのに、まだ階段にぶつからず、あるうことか周りは真っ暗な虚空である。下にはどす黒い雲が敷き詰められたでっかい球体のようなものがあり、ぐんぐん近づいてきている。どす黒い雲はどこどころ渦を巻いている。

再度上空を見る。真っ暗な虚空だが、きらきらちらちら星が瞬いている。

宇宙飛行士関連のニュースで流されていた、宇宙から見た地球とかいう映像と酷似している。

——これってまさか、宇宙だったりする？

「るあああああああああああつ」

神社の境内から飛び出したはずなのに、なぜ宇宙？

真奈美は再度パニックに陥った。

しばらくじたばたしたものの、滑空していてもなかなか眼下の雲に到達しない。宇宙に放り出されてしかも背中に翼が生える、という想定外の事態に陥ってはいるものの、死んでない。死んでみるつもりだったのだが、結果、生きてる。ひとまずどうにかなるんだつたらしてみるか。考えることをやめて真奈美は翼を折りたたみ、まっすぐに下降することにした。

翼をたたみ、頭を下にして背をぴんと伸ばしてみると、空気が頬に擦れずひりひりしないことが分かった。眼下の雲はぐんぐん近づいてくる。真奈美は高校生。義務教育を修了しているので「ふわふわの雲に乗って〜」などと夢のようなことは考えない。家族旅行で何度か飛行機にも乗ったし、雲がどういうものか、分かっている。

しかし、これだけ高いところから絶賛落下中なのだ。気流の変化ですらすさまじいインパクトを伴って体にぶつかる。雲が単なる水滴の集まりだとしても、おろし金みたいにがりがり体をすりおろすような衝撃を食らわないとも言い切れない。眼下を覆い尽くす雲海を避けるすべはなさそうだ。ならば、せめてかき分けるだけでも、と伸ばした己の腕に目をやって、真奈美は三度パニックに陥った。

—— 鱗？！

翼がもげそうな勢いで空気の抵抗を受けるのも構わず、体を確かめると、目視できる範囲すべてに紺色の鱗が生えている。手で顔をなでてみると、ざりざりとした何かに覆われている。きつと鱗だ。

—— ここはどこ？ 私、だれ？

「るあああああああああああつ」

叫ぶと、身中でぶるぶると何かが盛り上がり、駆け抜け、口から飛び出し、爆ぜる。頭を下に向けていたので、その衝撃は雲海に刺さり、飲み込まれ、一瞬ののちに雲海に穴が開いた。

雲海はぼっかりと穴をあけたがしかし、それがいけなかったか、紫色の火花がばちばちと走る。雷だ。

雷に照らされたのは一瞬。すぐに視界はどす黒い雲に遮られた。下は真っ暗で何も見えなかった。何があるんだろう。海だったらまだしも、地面だったら大変だ。ミンチになってしまふ。そもそも神社の階段下でそうなる予定だったことも、翼を広げて滑空しながら安全を確保することも忘れ、真奈美は分厚い雲を貫きながら叫び続けた。そして気を失った。

第二話 超ど派手なんですけど

「ごうごうと風が唸り、分厚い雲が低いところで蠢く。

真奈美が目を覚ますと、そこは波打ち際だった。結構長い間ざっぱざば盛大に波をかぶっていたようで体が冷えている。

夜は明けているようだが、朝なのか昼なのか、はたまた夕方なのかさっぱり分からない。天気が悪い、いや、台風レベルの大時化であたりが暗いのだ。

—— 頭、痛っ

頭だけではない。全身ぎしぎしと痛む。特に肩や背中がひどい。ひどくぶつけたような、筋肉痛のような鈍い痛みだけでなく、擦り傷ができたようなじくじくとした鋭い痛みも混じっている。

身を起こそうと腕を突いた途端、腕が視界に入った。

—— ぎゃあああ、なんじゃこりゃ

驚きに勢いよく起き上がると翼ががばっ、と開いた。
なんで?! とうろたえるも、

—— そうでした。神社の階段から落ちたはずがなぜか大気圏ぎりぎり辺りから万有引力を肌で感じるツアー強制参加でしかも背中にめりつと翼が生えたんですした

と真奈美は一部始終を思い出した。

体がガタピシ痛むけれど、万有引力体験ツアー後であることを考えれば、命があるだけで御の字。

御の字なんだけれども、今、自分の体がどうなっているのかとても気がかりだ。

ひとまず、何がどうなっているのか分からないが、背中に翼が生えたらしい。肩を回すとばさばさといっしょに動く。

腕が紺色の鱗におおわれている。

手の甲にも同じ色の鱗が生えていて、妙に鋭い爪はマニキュアなしなのに朱色だ。

真奈美は立ち上がってみた。

足も同じく紺色の鱗におおわれている。

膝から下が朱色で、かなりごっつい鋭利な爪が生えている。物騒な感じのそれも朱色。

体をよじりながら目につく範囲を確かめてみる。

腰から紺色の鱗びっしりの尻尾が生えている。尻尾の先にはメタリックの「喧嘩上等」的な物騒な輝きを放つ棘つき。

おなかには少し細かいオレンジ色の鱗。

翼は内側がグレーなんだけど、見える範囲では表が鮮やかなブルーみたいだ。

恐る恐る頭をさわってみると、ぽやぽやとした毛、というより羽根布団の中身、ダウンのような羽毛がふわふわと後頭部、首、背中に向かって生えているようだ。

鏡がないと見えない。見えないがしかし、確認できた部分だけとってみてももしかして――。

――私、超ど派手なトカゲとか始祖鳥みたいなものに変身しちゃ

ってんの？！

真奈美は自分が人間の姿をしていないことにショックを受け

「いやああああああああ」

と叫んだ。

叫びとともに真奈美の体の中から熱いものが飛び出る。

飛び出た熱いものは気体の塊のようなもので、放出の勢いを維持したまま、ぱうつ、と伸び、尾を引きながら浜辺のヤシの木のようなものをへし折り、どこかへ飛んで行ってしまった。

—— 今の、何？ 何なのーっ？！

「ああああああっ」

「いやああああああっ」

「ぎゃああああああっ」

真奈美が叫ぶたびに衝撃波がその口から無差別に発射される。

衝撃波は海の方こうに消えたり、接したあたりの雲を一瞬吹き散らしたりして吸い込まれた。

見たこともないほど近い嵐の雲や、紫色に不気味に輝く雷、身を叩く大粒の雨より何より、真奈美は得体の知れない自分自身が恐ろしかった。

第三話 妹背

人間にはヒト族と龍人族、ふたつの種族がある。

種の違いはあるものの、生物としてはほぼ同種で、交配も可能だ。両種族それぞれ神話は異なるが、共通しているのは神から与えられた支配の分担だ。ヒト族は山を、龍人族は水を。

ヒト族、龍人族、どちらも人間なのだが、龍人族は水中でも長時間活動可能である。中にはほぼ一日息継ぎなしで潜り続けられ、深海底に到達する者もあるという。しかし、陸上、特に山や砂漠など水のないところでは体力を維持できない。ただ、ヒト族との混血がすすみ、陸上での制限が少ない者が増えている。

龍人族の特徴は水に特化したフィールドだけでない。

龍人族は男も女もみな美しい。色が黒かったり白かったり人によってさまざまであるが、一樣につやつやとした肌理のこまかい透き通るような肌、冷たく表情に乏しい均整のとれた美貌をもつ。現存しないといわれる純血の龍人族は耳の後ろに色鮮やかな鰓を持ち、下半身が美しい鱗に覆われていたという。現在は独特の美貌と指の間の水かきが龍人族の身体的特徴となっている。

身体的特徴だけでなく、能力面でも水に特化した龍人族は、天候を読む技術や幻術に長けている。古くから行っている漁業だけでなく、得意とするフィールドを生かした水運や近年では海底の鉱物資源の掘削などの事業に乗り出し、軌道に乗せている。

かつてはお互いの得意とするフィールドを生かし共存してきたのだが、魔術の技術革新などを経て徐々に種族間で摩擦が増えてきたお互いを

「サカナ、魚人」

「ケダモノ、水に呪われた者ども」

と罵り合う。ヒト族最大勢力である神聖帝国では今上であるライカン帝の代になってタカ派が勢いづき、ヒト族諸国を巻き込み、龍人族と矛を交えるまでになった。

南洋の島国、龍人族翡翠国辺境部瑪瑙村。

一年を通じて温暖なこの地域は、雨季に何度か台風がやってくることを除けばごく平和である。実り豊かとは言えずとも海の幸に不自由せず飢えと無縁であるためか、古い神を奉じる人々の暮らしぶりも気質も素朴で大らかだ。

辺境の一漁村であろうと、翡翠国の参加するヒト族との戦争とまったく関係ないとは言えない。しかし、この地では戦のきな臭さは戦地との隔たりの分、遠く感じられるのだった。

それなのに。

嵐に乗じて奇襲をかけられた。

「まさかこんな辺境にまで敵がやってくるとは」

村の自警団に入っている背のきみが忌々しげに吐き捨てる。苗は手を引かれ、村の奥にある断崖に向かってひたすらに駆けた。

背後に目をやりつつ速度は緩めずに走るしなやかな体つきをした青年のことを背のきみと呼んでよかったのはつい数日前まで。苗は涙ぐんだ。

昨日まで、苗と青年は妹背と呼び合うことを許された許婚同士であつた。家と家の定めた婚約であつたが、本人たちも憎からず思い合い、はにかむ様を村の皆でほほえましく見守っていた。

—— 温かい夜に花開くという蜜瓜の花のように密やかでありながら
—— 思い合う様子はまるで、抑えようとも抑えきれず香り立つ水仙のよう

—— 妹よ、と腕に閉じこめたくとも、まだいとけない蕾なれば待ち遠しさもひとしおぞ

古歌になぞらえてふたりはうち離されていた。都から通達が届くまでは。

都からの使者は、ぬれぬれとした黒髪を高々と複雑な形に結いあげ、繊細な彫りの入った鼈甲の笄を差し、苗の見たこともないようなきらきらした打掛を羽織っていた。すっきりと切れ上がったまなじりに紅が差され艶めいている。それなのにその色気にあざとさは感じられない。年齢不詳の女官であるが、能吏なのだろう。

長の前で通達を読み上げ、これこれこうこう、と説明すると、

「該当する娘御がおられるな？」

と、扇で口元を隠し目を細めたが、視線ははつきりと、給仕のために長に呼び出された娘たちの一人、苗に向けられている。

人払い後、使者と向かい合った苗は、全身を検分するようなぶしつけな視線にさらされていた。

さすがに礼を失したことに気付いたか、使者は表情を和らげ微笑んだ。ヒト族の王宮だけに咲く牡丹とかいう花を目にすればこのような華やかさであろう、と苗はつい使者の美しさにつられておらずと微笑み返した。

「娘御は立派な鰓をお持ちじゃ」

苗には鰓がある。

耳の後ろにあり、左右それぞれ三本ずつ突き出た短く白い触手のような外鰓は桃色の羽毛に覆われている。本来水中での呼吸を可能にするためのものであったろうが、単なる先祖がえりで発現しただけのそれに呼吸器官としての機能はない。ちなみに、普段は衣服で隠れていて見えないが、腰から背中にかけて桜の花びらのような薄紅色の鱗がある。

いにしえの龍人族であればこのように、と珍しがられ、まだ赤子であった苗と少し歳の離れた神官の息子の婚約が整えられた。長じて後、身なりを気にするようになって苗は村の同じ年ごろの子どもの中で鰓をもつ者はないことに気付き、恥ずかしい思いをしてきた。しかし、背のきみだけは幼いころから苗の鰓を

「美しい」

と目の前の女官と同じように熱心に褒めてくれたのだった。

苗はうつむいた。背のきみに常々かけられるのと同じ褒め言葉だというのに、なぜだろう。いやな予感がする。

その予感は当たった。

背のきみとの婚約は解消となり、苗は神殿の巫女となるために都へのぼることになった。ヒト族との混血が進みすぎたことを危惧した王が先祖返りした娘を巫女として集めているのだという。神殿の巫女といっても神の妻というにしえの立場でなく、神殿付きの女官のようなものだ。望まれれば王の後宮に入らねばならない。それでも苗が村の総意に逆らわず神殿の要請に従うことを見越していたか、使者が村を出てすぐに衣装や装身具が届けられた。珊瑚のkanzashi。瑪瑙の筭。やわらかで艶やかな襲。螺鈿細工の化粧箱。香木で作られた扇。翡翠や橄欖石をあしらった飾り紐。白地に紅や桃色をあしらった古代模様の日傘。両親が少しずつ用意していた嫁入り支度と比べはるかに高価できららしいそれらを、村の娘たちが入れ替わり立ち替わり見に来ては「ほう」とため息をつく。ひとしきり衣装や筭を眺めて満足した後、娘たちは婚約解消となった神官の息子を囲み、誰がこの男を背のきみとし未来の神官夫人となるか、ぴーちくさえずり争う。その様子を遠くから眺めて苗は「ほう」とため息をつくしかなかった。

苗は神官の息子を背のきみと呼べない。そして彼の手がおずおずと、しかし優しく苗の鰓を愛でることももつない。

そして都からの迎えが来る前の夜、嵐に乗じて村は襲撃された。

「ヒト族だ!」

「なぜ我らの村を」

「避難、早く避難せねば」

人々の慌てふためき、叫ぶ声があちこちから聞こえる。

村の、街道側の入口あたりから火の手が上がった。

さらに火矢が次々に飛んできてあたりに燃え広がる。
おろおろ逃げ回る村人だけでない。鋭く走るいかつい影が見え始めた。ヒト族の兵だ。

——ここは戦場から遠いはず。なのになぜ

恐怖で縛りつけられ、凍りつく苗の耳朵を激しい叱咤が打ち据えた。

「逃げるんだ！」

乱暴に手をつかまれ、見上げると、隣に立つのは神官の息子であった。

二人で村の裏手の断崖を目指し走る。

「村の出入り口はすべて敵に押さえられた」

「じゃあ、どこへ逃げれば」

「裏の崖、あそこから海へ入ろう」

「……」

毎年、子どもたちが度胸試しをする場所だ。崖の下は海で、確かに飛び降りられないことはない。しかし、高い場所を怖がる苗は一度も飛んだことがない。まして今夜は嵐だ。波で断崖に叩きつけられればひとたまりもない。

「大丈夫だ。海に逃げればきっと大丈夫だから」

神官の息子は走りながら気丈に微笑む。

——助かるために飛ぶのではない、踏みにじられずに済むよう飛

ぶのね

―― 背のきみとともにあればきつと平気

苗もぎゅっ、と手を握り返す。

よろめきながら二人が辿り着いた断崖は、今では子どもたちの度胸試しの舞台でしかないが、かつては聖域だったそうだ。村に伝わる昔話によると翼をもつ龍人神にゆーわ様が世界を修復されたのちに天に帰還されるときに飛び立たれた場所だという。村のお社と崖を結んだ線をずーっと延ばした先ににゆーわ様の聖地の小島がある。

―― いつか遠い遠い将来、龍人の民が世界を大切に守り育てていれば必ず

―― 信じていれば必ず

―― にゆーわ様が聖地に降り立たれるのサ

二年前に亡くなったかんなぎの御婆は何度も、何度も飽きずに子供たちに語り続けた。

―― 遠い将来でなく今、村をお救いください、にゆーわ様……！

しっかりと指をからめ、うなずき合って二人が崖から飛び降りようとすると、村のほうからがちゃがちゃと金属のぶつかり合う音が近づいてきた。

―― 鎧……？

村を振り返る。

見なければよかった。思わず目を閉じる。

ごうごうと吹く風に煽られ、炎が踊る。

嵐なのに、豪雨なのに、炎が消えない。
もう村人の叫び声が聞こえない。

背のきみが苗の手を振りほどいた。苗がはっ、と目を開けるとヒト族の兵が近くに迫っている。兜を脱ぎ棄ててあらわになった顔は不精髭に覆われ、ぎらぎらと光の凝った眼は血走り、息を荒らげ、乱れた歯を剥きだす様子は憎悪が人間の姿をとったかのようなうだ。

「苗、飛べ！」

大きな剣を振り回す兵士に背のきみが飛びつく。がっぷり四つに組むが、龍人族は細身で、陸上では非力だ。熊のように荒々しく巨大な兵に圧されはじめた。

「逃がさんぞ、魚人め」

「苗、飛ぶんだ！」

恐怖に凍りつく苗は足をわななかせ、ただいやいやと首を振る。

「あああああッ」

目を瞠る苗の前で背のきみは袈裟がけに斬られ、倒れる。駆け寄ろうとした苗は、どん、と突き飛ばされた。崖から体半分落ちかけた時、痛みに敏感な外鰓のひとつを、ヒト族の兵がむんず、と掴み、剣を振り上げた。

—— いやだいやだ痛い痛い……！

必死に兵の手を振りほどき、苗は崖から飛び降りた。

こういうとき、意外なほど時はゆっくり過ぎるものらしい。
苗は落下しながらいろいろなものを目に焼き付けた。

血塗れの背のきみが苗に向かって腕を伸ばしている。
ヒト族の兵は大きな剣を振り上げたまま、口をぽかんと開け、目を丸くして固まっている。

背後の海から大きなものの気配が近づいてきてそして——空中へ飛び出した。

巨大な何かは青く鮮やかな翼を広げ、仰け反ると

「るあああああああああああああつ」

と絶叫した。

空気が激しく震える。

最後に苗は見た。

衝撃波が崖を砕き、村に向かって飛び去るのを。

——にゅーわ様、来てくださった……

荒れ狂う黒い海に叩きつけられるその瞬間、助からなかったであろう背のきみを思い、苗は涙をこぼした。

第三話

妹背（後書き）

【註】

「妹背」は古語で「妹と兄」きょうだいの意と、「妻と夫」夫婦の意があります。

しかし、今回は敢えて恋人（婚約者）同士の意で遣っております。ご了承ください。

第四話 皇子

神聖帝国。

もともとミナモトの大河沿いに発展した貿易国家である。二種族融和をスローガンとして掲げ、学術研究に力を入れることで種族身分関係なく優秀な人材を取り込み版図を拡大してきた。

しかし、それも今は昔。

ヒト族一神教を奉じ、周辺諸国を併呑し、共和制貿易国家が帝政になり、膨らんでそして、軍事国家になった。

かつて龍人族の元首を頂いたこともあるこの国は現在、ヒト族最大勢力であり、最右翼でもある。

神聖帝国第十八皇子ナーガ。その名は、古代語で龍を意味する。

父帝ライカンと、すでに故人となったナーガの母は何を思いその名を授けたのだろう。

ナーガの母は後宮の妃のひとりだった。皇族であつたが、龍人族の血を受け継ぐ女でもあつた。ナーガには母の記憶がない。幼いころに亡くなったからだ。龍人族特有の冷え冷えとした、表情に乏しい美女であつたと聞く。遺された絵姿からも龍人族に先祖返りしているかのような美貌がうかがえる。ナーガの線の細い美しさは母譲りだ。病弱なところも母に似たのだろうか。

後ろ盾となる母妃を失い、美しさのほかは特に誇るところもない。病弱で遅く生まれただけでない。龍人族の血を継ぐ皇子は自動的に世継ぎ候補から外れていた。

元老院の東宮派も、今は亡き皇后の腹から生まれた第四皇子派の
辺境貴族も、政治的な後ろ盾のないナーガのことなど眼中にない
というスタンスだ。彼らからすると純血でないナーガはヒト族では
ない、ということらしい。敵である分には構わないが、戦局が芳し
くない現在、魚人と密かに蔑むナーガに味方されても困るのだろう。

権力から外れたところにあるナーガからすると、この種族間戦争
は実に馬鹿馬鹿しい。

元老院タカ派貴族は、

「魚なんぞ食わずとも人間は生きていける」

などとぶちあげている。

漁業に携わっているのは龍人族だけでない。比較すると少なく
てもヒト族の漁師だっているのだが、どうも元老院タカ派貴族の目
には映らないものであるらしい。ちなみに彼らの言う「人間」とは、
ヒト族のみを指す。

魚が好物で、そんなところも龍人族めいていると後ろ指を指され
るナーガにとっては一大事だが、確かに魚だけを食べているわけ
はないのでそこは百歩、いや、一万歩くらい譲ってよしとしよう。

確かに、問題は漁業だけではない。

龍人族の支配地域は単に海辺だけでなく、地方によっては川や湖
にまで至る。喧嘩を吹っかけていい相手ではない。事実、水運業を
営む龍人族の力を借りられず、商家の売り上げが落ち込んでいる。
元老院のところに毎日大商人の使いが通い詰めていると聞いた。陳
情のためだ。

そもそもこの戦争は種族間の経済力の均衡が崩れて、龍人族に富が偏ったことに対する不満が募ってヒト族が起こしたものだとなーガは考えている。

魔術の技術革新によって魔法道具が進歩しておよそ百年。もともとこの世界に存在した魔術だが、ヒト族諸国で盛んに発展した技術だ。そして魔術回路を搭載した魔法道具の発明により、昔では考えられないくらい多くの荷物を遠くまで運べるようになった。遠くの人間と通信できるようになり、砂漠の真ん中で新鮮な魚を食べられるようになり、深海底を魔法道具で探査できるようになった。便利な世の中である。

だが、魔法道具の動力源となる魔結晶が現在のところ、深海底でしか発見されていないのである。

水中で自由に活動できる人種であるとはいえ、龍人族にとっても高水圧、低水温という深海底の過酷な環境下での探査や掘削は容易でない。しかも、魔結晶の加工そのものは難しいのだが、高水圧・低水温環境で行えば破損等の無駄が少ない。つまり深海底が向いているのだ。

こうなると当然、魔結晶関連の事業は龍人族に独占されることになる。資源の少なさと入手難易度の高さから魔結晶の相場が高騰しはじめると、ヒト族から不満が出始めた。

——魔法道具は我々ヒト族が発明したのに、得をするのは魚人どもか

理屈に合わない。不満とも言い難いただの戯言だ。魔法道具の発明と魔結晶高騰の間に相関がかけらもないとは言わないが、それらは全く別の事象なのである。

それでも市井のこここで囁かれ、大きなうねりとなればただの戯言と切り捨てることができない。膨れ上がった不満を抑え込むことで矛先が内に向いても困る。

そんな中、事態が動いた。

海岸で避暑中の皇族が暴漢に襲撃された事件だ。龍人族翡翠国王太子に嫁ぐことが決まっていた第八皇女とその生母である皇后、護衛や側仕えの女官多数がこの事件で殺害された。この事件の首謀者が龍人族だったことで帝国内の不満は一気に膨れ上がり、捌け口を求め暴れた。

他にも事情はあったのだろうが、ナーガには分らない。父帝ライカンはヒト族諸国を巻き込み、戦争を始めた。

皇族としての価値のない自分には関係ない、と思っていたナーガであったが、本人の望まないところで脚光を浴びることになってしまった。

政治や経済、軍事面はからつきしたが、ナーガは魔術研究分野で頭角を現した。

神聖帝国の皇族男子は強さで他者を圧倒することが美德とされ、魔術研究は不人気である。魔術の研究というのは皇族の中ではどちらかというと皇女向けの仕事であるとされている。食品冷凍用魔法道具回路の補助魔術だとか、伝統的刺繍文様の自動的展開図作成魔術などの、家としての格や伝統を守り固く維持するための新魔術開発によって皇族女性として秀でているか否かを判別される。魔術にかかわる人間のすべてが女性ではないが用途によっては自ずと性別による線引きがされるのが神聖帝国、ひいてはヒト族社会暗黙のルールである。

ナーガの専門分野は古文書の解読による禁呪研究。専門家が少なく、魔術の中でも男性の携わる分野ではある。物理的な強さをアピールする職業でないだけでなく、過去の優れた皇族男子と目される人物の中には軍人、政治家として激務に耐えながら精力的な魔術研究を行った猛者もあったために、ナーガは皇族男子として

「片手間ならばまだしも」

と、評価を下げているといえる。

ナーガ自身は権力闘争でのし上がる気もないわけで、好きなことにのんびり没頭できる魔術研究者という仕事に大いに満足しているのだが、ある日、見つけてしまったのである。境界を越える禁呪の再現方法を。

禁呪研究者が鼻の穴をふくらませて興奮するならばまだ分かる。同好の士であれば

「いい仕事だな、おい！」

と肩をばんばん叩いて当然の画期的発見である。が、いかに画期的であるかを理解する人間がそうたくさんいるとも思えない。ナーガは半ば自棄っぱちな気持ちで同好の士向けに論文を書いた。それにも関わらずこのマイナーなジャンルの業績が、不思議なことに父帝の関心を引き起こしたらしい。ナーガは父帝から個人的に召喚された。

宮殿敷地の奥、後宮とは別に設けられた父帝プライベートエリア内にある私室の前にて。「陛下はなぜ魚人なんぞをお呼びになるのか」などとひとくさり父帝の側近に嫌味を聞かされてやっと、目通りがなかった。

驚いたことに完全に人払いされていた。

神聖帝国皇帝ともなるとたとえ息子であつても一対一で顔を突き合わせたりしない。帝国宮廷の品格を維持するためではない。クーデターを警戒するからだ。たとえナーガのように権力闘争から外れた皇子であろうと、いや、むしろそのような後ろ盾に保護されない立場だからこそ危険分子との接点を持つ可能性が捨てきれないのだ。

「ナーガよ」

父帝は私室の中央に立っていた。
ちかしく話すのが何年ぶりなのかさえ記憶にない。間違いなくお互いに。

「禁呪を解いたそうじゃな」

「はい」

「異界へ渡ることができるとな」

「はい」

「ナーガよ、人を異界へ送ることは可能であるか」

「はい、理論上は可能です」

「ふむ。では、そなた、異界で探しものをせぬか」

質問、あるいは提案であると樂觀視するのは危険だ。これは勅命。
ナーガは躊躇を悟られないぎりぎりのタイミングで

「かしこまりました」

と答えた。

これでしばらく、社会的な死に追いやられずに済む。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6349z/>

境界を越えて

2011年12月24日00時49分発行